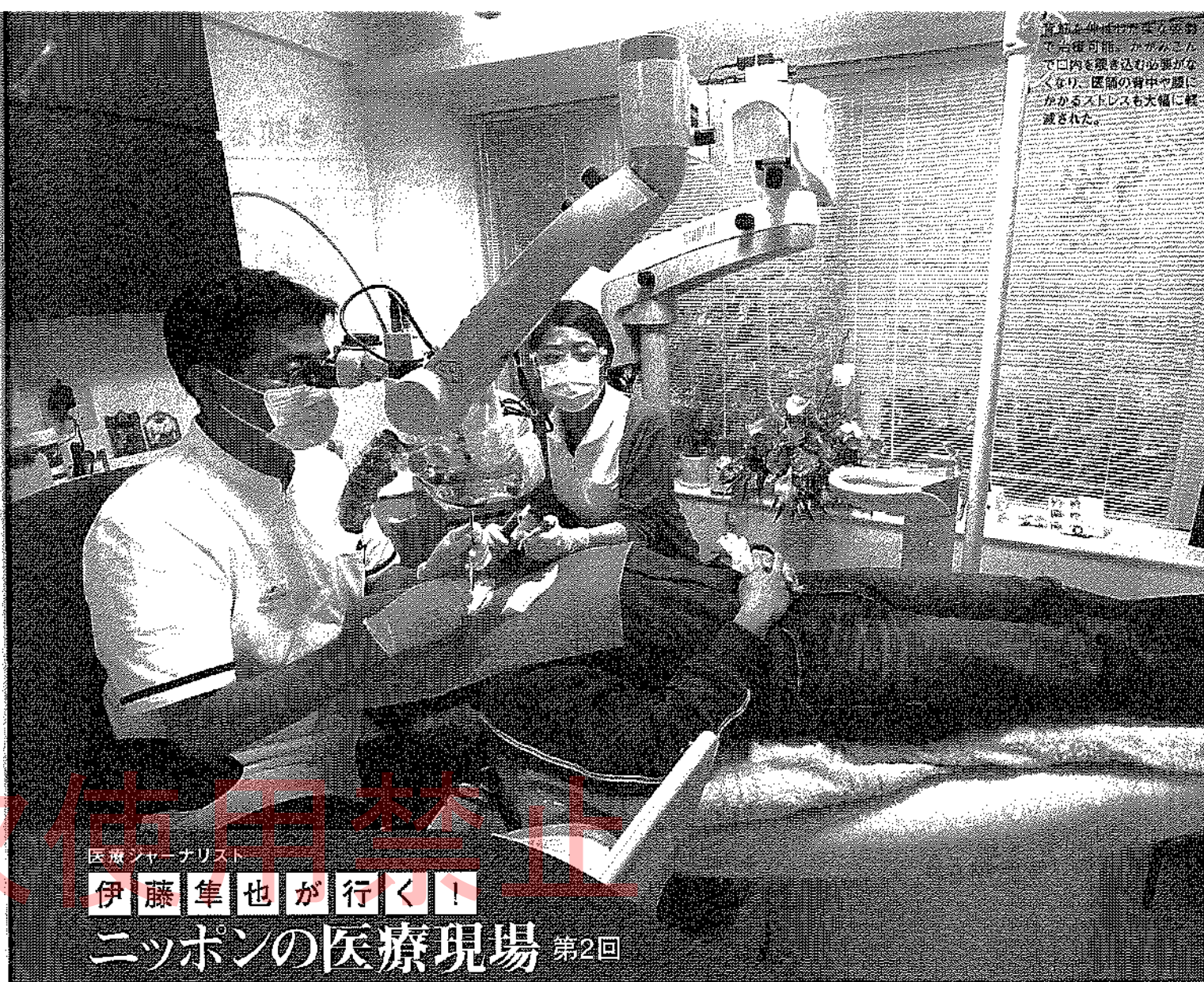


歯の神経が死んでしまえば、歯は歯の骨に埋め込まれ、口内を覆うだけの役割がなくなり、歯肉の骨中や膿に広がるリスクも大幅に軽減された。



伊藤隼也が行く！ ニッポンの医療現場 第2回

医師の肉眼で確認不可能な病変を見つける！ 歯科用顕微鏡が 歯科医療の現場に革命を起こす！

歯の病気と全身の病気との関連が指摘される昨今、「よりきめ細かい治療ができる」と大きな注目を集めているのが「歯科用顕微鏡（マイクロスコプ）」だ。文字通り「手探り」で行なわれていた歯科治療に光を当てる、画期的な機器である。

**歯周病で
心筋梗塞のリスクが増加**

あなたのかかりつけの歯科医院を思い出してほしい。診療室内に、上の写真のようなモノはあるだろうか。

現在、日本国内にコンビニが約4万4千店あるのに対し、歯科医院はなんと約6万8千施設。駅前には色とりどりの看板が乱立し、さながら、歯科医院大競争時代の様相を呈している。だが、冒頭の問いに対する読者の大部分の答えはおそらく「ノー」なのではないだろうか。

写真の機器の正体は、治療の際に口の中を拡大して観察することができる「歯科用顕微鏡（マイクロスコプ）」である。最近にわかに脚光を浴びつつあるとはいえ、その数は日本国内に2000台弱割合にすれば全歯科医院の2%程度と、普及にはまだほど遠いのが実情だ。

歯を健康に保つことの重要性はあらためていうまでもないが、その目的は、なにも楽しい食事や会話のためだけではない。アメリカの論文で、「歯周病になると心筋梗塞になるリスクが高まる」という



倍率は機器にもよるが、20倍程度まで設定できる。

取り除き、根管の中に薬を充填するなどして再感染を予防する必要がある。この治療をおろそかにすると細菌が増殖を繰り返して患部が再び痛み出し、最悪の場合、歯を失うことにもなりかねない。

1ミリ以下の病変は肉眼では確認不可能

だが、根管治療は歯科医の技術力の差がはつきり現れる分野でもある。根管は非常に小さく形状もそれぞれである上、口の中は光が届きにくい。洞窟だ。患部が見つからない状態で細菌を完全に取り除くのは極めて難しい。

根管治療に限った話ではない。現在、歯科用顕微鏡による治療に取り組むある医師によると、肉眼で確認できる病変はせいぜい大きき1ミリ程度。つまり、それ以下の場合にはよく見えないまま治療がなされているということだ。これは驚くべきことではないだろうか！

当然、こうした治療方法にはリスクも少なくない。実際、歯を削る際に誤って別の歯を傷つけてしまうと、そこから6割以上の確率で新たな虫歯が発生するというデータもある。

る。「歯科治療では再発が多い」と感じている読者も多いのではないだろうか。

歯科用顕微鏡の登場は、そんな歯科治療の現状に革命的な変化をもたらした。実際には顕微鏡を覗いてみると、肉眼では決して観察できない根管の奥の奥までクリアに見えることに驚かされる。見える世界がまったく違うのだ！

これだけ精細な映像で病変を確認できれば、根管治療に至る前に精緻な治療が可能になりすべての歯科治療において治療の質を大幅に上げることができるだろう。

歯科用顕微鏡が捉えた口内の様子は、ベッド横の液晶モニターに映し出され、録画も可能なため、患者への説明や治療の評価に役立つ。「医療の可視化」により治療の質の向上が期待できることもまた大きなメリットといえる。

患者のニーズと乖離した 歯科医療行政の現状

ところが、冒頭で述べた通り、歯科用顕微鏡の普及率はあまり芳しくない。その原因のひとつに挙げられるのは、使っても使わなくても保険点数が変わらず、医師側に経済

的なメリットがまったくないという現実だ。悲しいかな、日本の歯科医療行政は、より質の高い医療を求める患者のニーズとは大幅に乖離しているといわざるをえない。

また、機器が一台あたり数百万と非常に高価なことも普及を阻む足かせとなっている。メーカーにもさらなるコスト

ダウンを期待したいところだ。一方で、医師の側にも努力の余地はある。巷に歯科医が溢れるこのご時世だからこそ、歯科用顕微鏡は他の医師との差別化につながる格好の材料になるのではないだろうか。

歯科医にとって、「ペンツョリ絶対」に投資効果の高い「一台！」である。



治療の様子を動画や静止画で撮影し、自ら見返したり、治療方針を患者と相談したりすることもできる。